

『マヤ・オリエンタリズムとエリック・トンプソン』

青山 和夫

1. マヤ・オリエンタリズム

1.1. 「歪められた」マヤ文明観

世界に数ある古代文明のなかでも、日本社会においてマヤ文明ほど「謎・神秘の古代文明」というレッテルを貼られ、誤解されている文明はないかもしれない。マヤ文明を含む中米のメソアメリカ文明および南米のアンデス文明は、旧大陸の「四大文明」とともに世界六大文明を形成した（青山 2007）。マヤ文明（前600年-16世紀）とは、メソアメリカの南東部、現在のメキシコ南東部から中央アメリカ北西部（ベリーズ、太平洋岸低地以外のグアテマラ、およびホンジュラス西部）に興隆した都市文明である。世界の他の古代文明と同様に農耕を生業の基盤としながらも、世界の他の古代文明と異なり石器を主要利器とする新石器段階の技術と人力エネルギーによって都市を築き上げた。主要利器が石器であったことは、マヤ文明が、旧大陸の「四大文明」よりも「遅れていた」ことを必ずしも意味しない。古代マヤ人は、旧大陸世界と交流することなく、結果的に、利器としての金属器、荷車、人や重い物を運ぶ大型の家畜を必要とせずに、都市文明を繁栄させた。そして、先コロンブス期（1492年以前）の南北アメリカで、文字、暦、算術、天文学を最も発達させた。文字の発達は、同じくモンゴロイドの土着文明でありながら、文字のなかったインカ文明をはじめとする南米のアンデス文明と対照的である。さらにマヤ文明は、インダス文明と並び、ゼロの概念を独自に発明した。筆者は、こうした意味でマヤ文明を人類史上で最も洗練された「究極の石器の都市文明」と位置付けている（青山 2005）。マヤ文明は、「我々人類」の歴史の重要な一部であるだけでなく、現代からも隔絶したものではない。16世紀にスペイン人が侵略するまで、マヤ文明は発展し続けた。800万人を超える現代マヤ人は、今日に至るまで形を変えながらマヤ文化を創造し、力強く生き続けている。マヤは、地球の反対側で現在進行形の生き続けている文化なのである。

19世紀以来、マヤ文明は、欧米の研究者を中心にして、先コロンブス期のアメリカ大陸の諸文明のなかで最も集中的に調査されてきた。対照的に日本におけるマヤ文明研究の伝統は浅く、筆者を含む日本人による最初の組織的な現地調査は、1980年代にホンジュラスで開始された。それも一因であろうか、マヤ文明は、日本ではまだあまり良く知られていないばかりか、現代社会とはつながりのない「失われた文明」や「謎・神秘の古代文明」として、いろいろと誤解されている。さらにマヤ文明は、メキシコ中央高地のアステカ文明や南米のインカ文明などととも、「新大陸の古代文明」として一括され、「インカ・マヤ・アステカ」というふうに関係・混同されることが多い。今なお、マヤ文明の学術研究と一般社会の持つ知識の乖離は大きい。近年の調査研究の結果、それほど神秘的ではなく、より現実的なマ

マヤ文明観が構築され続けている。にもかかわらず、マヤ文明に関する多くのテレビ番組や一般書・雑誌では、謎・不思議・神秘性をおもしろおかしく強調して「歪められた」マヤ文明観、すなわち、マヤ・オリエンタリズムが捏造・再生産され、消費され続けている（青山 2000, 2001）。特に、テレビ番組の影響力が強い。テレビ番組は一過性であろうが、謎・不思議・神秘を誇張して繰り返し放送されれば、誤ったマヤ文明観が定着してしまう。非良心的なマスメディアは、「マヤ文明＝宇宙人起源説」やそれに類似した興味本位の言説まで流布している。この手のテレビ番組は、マヤ文明を未知・謎のままにしておきたいようで、科学的に解明されてしまうと困るのかもしれない。こうした残念な傾向は、中学高校の世界史の教科書において、マヤ文明をはじめとする先コロンブス期の南北アメリカ大陸の文化や歴史に関する記述が、旧大陸のそれと比べて質量ともに極めて貧弱であることと無関係ではないだろう。

1.2. マヤ・オリエンタリズムの起源と形成

マヤ文明は、16世紀にスペイン人によって「発見」されて以来、「旧大陸の古代文明の移民によってもたらされた」とする、数々の誤った言説が生み出された。たとえば、エジプト、ギリシア、ローマ、フェニキア、ケルト、イスラエル、メソポタミア、インド、中国、日本、果ては「失われたアトランティス大陸」や「ムー大陸」といった架空の捏造大陸が、起源地として挙げられてきた。「宇宙人や旧大陸の古代文明が、マヤ人に文明をもたらした」という誤ったマヤ言説の根底にあるのは、「先住民は独自に高文明を発展できない」という、権力格差や人種偏見に根差した歴史観である。偏見に満ちたマヤ・オリエンタリズムの生産と消費は、先住民たちの豊かな歴史・文化伝統に対する侮辱以外のなにものでもない。そして、多くの日本人にとってまだ親近感の薄い、中米の歴史・文化伝統の正確な理解を妨げ歪めている。

実はこうしたマヤ・オリエンタリズムは、20世紀半ばまでのマヤ文明を「世界史上まれにみる神秘的でユニークな、謎の文明」とみなす見方に由来している。それは、19世紀から20世紀半ばまでの調査成果や多くの憶測に基づいて、欧米のマヤ学者たちが編み出した、ロマンチックで神秘的なマヤ文明観であった。マヤ・オリエンタリズムは、優越社会の「植民地主義考古学」が投げかけた視線の産物といえよう。すなわち、マヤ文明を調査する側にあり、現地社会に対して絶対的に優位な政治的・経済的・文化的権力格差をもっていた当時の欧米の学者たちが、非西洋文化のマヤ文明をどのように表象したか、あるいはどのように表象したいと欲していたかという、植民地主義的な異文化・他者認識がそこに見て取れるのである。ちなみに、中米諸国の考古学者の調査は、欧米の学者よりもかなり遅く開始された。日本の文化庁にあたる国立人類学歴史学研究所が設立されたのは、たとえばメキシコでは1939年、グアテマラでは1946年、ホンジュラスでは1952年であった。またペリズは1981年までイギリスの植民地であり、国立文化歴史研究所は2003年に創立された。

困難な野外条件に立ち向かった、19世紀から20世紀前半までの欧米の探検家や考古学者の先駆的な調査研究によって、マヤ文明の基礎データが蓄積されていった。特にマヤ暦、天文学や宗教の研究、および土器や建築の基礎的な編年の確立が、重要な学術的成果といえよう。ワシントンのカーネギー研究所に所属し、20世紀を代表する偉大なマヤ学者であった、アメリカ人のシルバーヌス・モーリー（1883-1948年）やイギリス人のエリック・トンプソン（1898-1975年）らが、こうした20世紀半ばまでの1世紀余りにわたるマヤ文明の基礎的なデータを総合化して、マヤ文明を「世界史上まれにみる神秘的でユニークな、謎の文明」という見方を形成・確立・普及させた (Morley 1946; Thompson 1954)。

とりわけ、トンプソンは、マヤ考古学、言語学、民族学に関する本・論文など、250を超える著作を出版し、半世紀にわたってマヤ学界に君臨して深遠な影響を与えた。トンプソンの学術論文や調査報告書には、実証的で慎重な記述が多い。対照的に一般書では、多くの憶測に基づき、その独自のマヤ文明観を前面に押し出した。『マヤ文明 (*The Civilizations of the Mayas*)』(1927年初版、1942年第4版)、『マヤ文明の興亡 (*The Rise and Fall of Maya Civilization*)』(1954年初版、1966年第2版)、自伝の『マヤ考古学者 (*Maya Archaeologist*)』(1963年)などに、トンプソンの神秘的なマヤ文明観が明瞭である。特に『マヤ文明の興亡』は、トンプソンのライフ・ワークであり、20世紀のマヤ考古学を代表する名著といえよう。その初版は1954年に出版され、それまでのマヤ文明の調査の成果を総合化したものであったが、第2版はそれを修正加筆して1966年に出版された。当然のことながら、出版後の調査研究の成果の積み重ねにより、既に新たな知見が得られている箇所も多いが、マヤ文明の研究史におけるその学術的な意義は大きい。初版も第2版とも、スペイン語に翻訳されて、20世紀最大のマヤ文明のベストセラーとなり、今なお学者や旅行者たちに読まれている。トンプソンの長い経歴と名声、百科事典的な深い学識、説得力のある文体が、彼の学説が長年にわたって受け入れられることに寄与したのである。

本稿は、『マヤ文明の興亡』の第2版 (Thompson 1966) を中心に、トンプソンの神秘的なマヤ文明観の特徴について論じ、新しいマヤ文明観と照らし合わせて、トンプソンのマヤ文明観の形成の背景・要因を分析・考察する。またトンプソンの「声」を直接反映させるために、彼のマヤ文明観が顕著な箇所の直接引用を多用することにしたい。マヤ・オリエンタリズムを脱構築するためには、神秘的なマヤ文明が形成された文化的・歴史的背景の分析が必要不可欠かつ重要だからである。

2. トンプソンの生涯

ジョン・エリック・シドニー・トンプソンは、医者の子として1898年にロンドンで生まれた (Hammond 1994)。有名なパブリックスクールのウィンチェスター・カレッジ (1382年創立) で学び、後に創設者ウィリアム・オブ・ウィカム司教に『マヤ文明の興亡』を捧げている (Thompson 1954 : x)。第一次世界大戦に従軍するが、負傷してしまい、治療のために帰

国を余儀なくされた。戦後は、アルゼンチンにあるトンプソン家の大農場で、4年間ガウチョ（パンパと呼ばれる大平原のカウボーイ＝牧童）として働いた。その間に、極めて流暢なスペイン語を話すようになる。トンプソン家は、アングロサクソン系アルゼンチン人の家系であり、父親もアルゼンチン生まれであった (Coe 1999:124)。

1922年にイギリスに戻り、ケンブリッジ大学で人類学を専攻し、著名な人類学者アルフレッド・C・ハッドンの指導を受けた (Sabloff 1994:52)。1926年に、アメリカ人マヤ学者モーリーが指揮するチチェン・イツァ遺跡の調査に参加した。1927年には、大英博物館の調査隊の一員として、ベリーズのルバアントウン遺跡やプシルハ遺跡を調査した。1928年には、シカゴ自然史野外博物館のためにベリーズの調査を続行した。1936年まで、ベリーズのサン・ホセ遺跡を発掘調査したが (Thompson 1939)、トンプソンが、本格的な発掘調査に従事したのは30才代後半までだった。もともとマヤ文字の碑文に強い関心を抱いていたので、その後は主にマヤ文字の研究に没頭したのである。1936年から1958年までワシントンのカーネギー研究所の研究員として、退職後も1975年に亡くなるまで、計50年間にわたってマヤ文明の研究に貢献した。イギリスの大学では1966年まで新大陸考古学のポストは存在せず、トンプソンは、生涯大学で研究教育に従事することはなかった。換言すれば、トンプソンは大学のポストに一度もつかなかったために、大学の授業に合わせて調査計画を決める必要がなかったのである。

トンプソンは、文字通り「長老」として、マヤ考古学の発展に深遠な影響をもたらした。ベリーズ南部の土器編年を確立し、マヤ暦、天文学、図像学、宗教、神話の先駆的な研究を行った。ジョーセフ・グッドマンが1905年に提唱し、1927年にメキシコ人学者ファン・マルティネスとトンプソンが修正した、いわゆる「グッドマン-マルティネス-トンプソン相関」を確立し、古代マヤ暦と西暦の相関を明らかにした。さらにトンプソンは、『マヤ文字のカタログ (A Catalog of Maya Hieroglyphs)』というマヤ文字一覧の書を初めて刊行し、研究者の間で広く活用された (Thompson 1962)。そして、絵文書をはじめとする民族史料を精力的に研究した (Thompson 1970, 1972)。トンプソンは、母校のケンブリッジ大学、アメリカ、メキシコの大学から計4つの名誉博士号、スペイン政府からイサベル1世勲章、メキシコ政府からアステカ勲章、グアテマラ政府からケツアル勲章を授与された。1975年にはエリザベス2世によって、新大陸考古学者として初めてナイトの称号を授与され、その9ヶ月後にケンブリッジで亡くなった。

次に、トンプソンの神秘的なマヤ文明観を概観してみよう

3. トンプソンの神秘的なマヤ文明観

3.1. 「空白の儀式センター」と「神官支配層と農民の二階層社会」

古典期マヤ文明は、真の都市文明であった (青山 2005:110)。しかし、トンプソンは、古典期マヤ文明は「都市なき文明」という学説を主張し続けた。トンプソンによれば、一握り

の神官支配層が、人口が希薄な「空白の儀式センター」で、天文学、芸術、暦の計算や宗教活動に没頭した。神官と調和を保った農民は、儀式センター周辺に散在する村落に住み、トウモロコシを主作物とする焼畑農業だけを行ったと信じていた。特筆すべきことに、「空白の儀式センター」や「神官支配層」といった神秘的な見方は、学術論文や調査報告書には見当たらない (e.g., Thompson 1939, 1945, 1948)。すなわち、それは一般書を通じて欧米社会に発信されたのである。

「マヤ都市は、現代的な意味では全く都市ではなかった。なぜなら、それは都市センターではなく、儀式センターだったからである。そこでは、人々が、宗教儀式、公共の諸活動や市場のために寄り集まってきた。」(Thompson 1966:66, 筆者訳)

トンプソンは、自らが帰属する西洋の上流階級や西洋文明を投影して、考古資料を主観的に解釈する傾向があったために、神秘的なマヤ文明観の形成が助長された。アメリカ人考古学者マーシャル・ベッカーは、「神官支配層と農民が調和した儀式センター」という見方が、ヨーロッパ中世の大聖堂とその建設のイメージに大きく影響されていたと論じる (Becker 1979:12)。「神官支配層と農民の二階層社会」というトンプソンの学説は、実証的な考古資料で立証されたものではない。むしろトンプソンの中世ヨーロッパ社会のイメージや独自の宗教観、明確な社会階級の区分が存在した20世紀前半のイギリスの社会構造に由来したと考えられる。「都市なき文明」という誤解は、当時のアメリカ合衆国やイギリスで都市化が進み、暴動を伴う労働者階級のストライキが勃発していたために、上流階級に属したトンプソンの都市化に対する個人的な嫌悪感や恐怖感と強く関連していた可能性が高い。

トンプソンの学識の深さは、マヤ文明だけにとどまらない。『マヤ文明の興亡』では、各章の冒頭や本文中に、内容とは直接関係のない、シャーリー、チョーサー、ハウスマン、ディケンズ、ハクスリー、シェリー、キプリング、オースティン、ヘリックといった、イギリスの詩人や作家の文章、さらには『旧約聖書』まで引用・言及している。イギリス人のトンプソンは、マヤ文明と欧米の歴史や社会を比較しながら記述したので、日本人にはわかりづらい箇所が散見される。次の文章は、イギリスの伝統的な町バーチェスターの地元の名士のブルーディー夫人やハーディング氏とマヤ文明の支配層を比較した一例である。「ヴィクトリア朝風の自己認識」とケント・マテューソンが呼んだように (Matthewson 1977)、トンプソンは、オーストリアのザルツブルクの教会公国や英国大聖堂と比較し、マヤ文明を主観的に解釈したのである。

「儀式センターは、農民たちを統括し、彼らの生活のほとんど全ての側面を指示した神官と貴族 (両者はしばしば区別できなかった) の小集団の象徴であった。これは、神権政治家としての役割を担った小集団だった。農民たちは、食料を生産するとともに、神殿、ピラミッド、

宮殿を建設し、増改築する労働力と建築材を頻繁に提供した。神官は、神聖な知識によって、農民たちと大地の神々の仲介をした... ザルツブルクのような古い教会公国と大まかに比較できるかもしれない。そこでは、大聖堂、行政上の建物群、尼僧院や修道院に囲まれて、主教君主が壮麗に暮らしていた。これらの建物には、当時のあらゆる芸術が浪費されていた。あるいは、宗教と教会の面だけから、英国大聖堂と比較することもできる。マヤ文明の古典期に関しては、現実からそれほどかけ離れていないだろう。必要な修整を加えれば、古典期のマヤ支配層と酷似する英国教会大執事、ブルーディー夫人とハーディング氏の一種の異国風の小道具として、シルクハットではなく、ケツアル鳥の羽根で頭を飾り、1820年物のポートワイン——『適切なものでなければ、主教にはもったいない』——ではなく、マヤ人の蜂蜜酒バルチェをちびりちびり飲んでいる。実際のところ、あらゆるマヤ文明の重要な儀式センターは、熱帯イギリスのバーチェスターの一種とみなされるかもしれない。そして、ボナンパック遺跡の壁画には、判事席の主教を見ているブルーディー婦人の見事な肖像がある。適切な人物が統括していた間だけ、古典期はもちこたえたのである。」(Thompson 1963:49-50, 筆者訳)

20世紀半ばまで、マヤ考古学は、ハーバード大学ピーボディー博物館、ワシントンのカーネギー研究所、ペンシルヴェニア大学、大英博物館などに属した、上流階級の欧米マヤ学者だけの特権・趣味であった。また、男性が圧倒的多数を占めたために、神秘的なマヤ文明観は極めて男性中心的といえよう。欧米マヤ学者の関心は、古典期(後250-1000年)のマヤ低地南部の大遺跡中心部、とりわけ神殿ピラミッドなどの大建造物、マヤ文字が刻まれた石碑や祭壇といった石造記念碑などの支配層文化に偏っていた。古典期のマヤ低地南部の調査が強調されたのは、マヤ文字の碑文が多く登録されたからであった。被支配層の文化、マヤ低地南部以外のマヤ地域、古典期の前後の先古典期(前1800-後250年)と後古典期(1000年-16世紀)が軽視され、古代マヤ社会全体を復元する上で大きな偏りが存在した。これは、例えるならば、30世紀の考古学者が都心の高層ビルや皇居の主要建造物だけを調査して、20世紀の東京都の文化を復元するようなものであった。

20世紀後半から、(1)第二次世界大戦後の自由な時代の雰囲気の中での調査研究の積み重ね、(2)考古学の方法論の発達、(3)マヤ文字の解読の進展、(4)米国科学財団(NSF)の創設、および(5)アメリカの大学の人類学部の急増に伴う教官ポストの大幅な増加などによって、より現実的な新しいマヤ文明観が形成されていった。上流階級以外のマヤ研究者が大幅に増加し、あらゆる社会階層の男女の考古学者が、マヤ文明研究に多様な社会経験や幅広い視点をもたらすようになった。そして、最も革新的な方法論の一つとしてセトルメント・パターン(人々が景観上に残した遺構や遺物の配置パターン)の研究がマヤ考古学に導入され、トンブソンの「都市なき文明」説が否定された。従来の大遺跡の中心部だけでなく、大遺跡全体、中小遺跡を含む広い地域の踏査、測量、発掘調査が体系的に行われ、マヤ考古学は、「点の考

古学」から「面の考古学」へと変遷したのである。つまり支配層と被支配層の両方に関連した全ての遺構や遺物に焦点をあてた、より代表的なサンプリングが行われるようになった(青山2005:23)。その結果、数多くのマヤの大都市は数万人の大人口を擁したと同時に、国家的な宗教儀礼の他、政治・経済活動もかなり都市に集中していたことが明らかになった。さらに都市人口を支えるために、農民が、焼畑農業と様々な集約農業(中小河川、沼沢地や湧水を利用した灌漑農業、段々畑、家庭菜園など)を組み合わせて多様な作物を生産したのである。

3.2. 「温和で宗教的なマヤ人」、「市場」、「古代メキシコ人の侵略」、「生贄」の誇張：考古資料を解釈する方法論の未発達

トンプソンは、1927年から1929年にかけて英領ホンジュラス(現在のベリーズ)南部の発掘調査中に、現代マヤ人の作業員たちとの親交を深め、極めて良い印象をもち、彼らから収集したマヤ人の民話、社会構造、宗教などを報告書としてまとめあげている(Thompson 1930)。とりわけ、ガイド兼通訳のサン・アントニオ村のファウスティーノ・ボルと友人になった(Thompson 1963:101-102)。ボルは、若いモパン・マヤ人であり、母語のモパン語だけでなく、ケクチ語、スペイン語、さらに英語も少し話せた。トンプソンとはスペイン語で会話を交わしたが、その好印象を次のようにまとめている。

「ベリーズのサン・アントニオ村のマヤ人作業員たちとの交流、そして旅路でのファウスティーノとの長い会話は、彼らマヤ文明の末裔たちが、今なお数多くの古代の習慣や宗教観念を保持していることを指し示していた。こうしたマヤ文明の残存は、研究するに大いに値すると思われた。したがって、そうした残存について最大限に情報収集をするために、サン・アントニオ村に最初に滞在する時には、現代マヤ人と同様に生活することにした。というのは、考古学の発掘調査が、古代の生活様式を理解する唯一の方法ではないことが明らかだったからである。実際のところ、つるはしとシャベルでは、昔からサン・アントニオ村に残っている数多くの習慣を解明できないだろう。」(Thompson 1963:117, 筆者訳)

トンプソンの神秘的なマヤ文明観の形成において特筆すべきは、トンプソンの終生の親友であり、コンパドレ(子供の洗礼に立ち会う代父・名付け親)のハシント・クニルとの交流であった。クニルの長所や性格は、トンプソンのマヤ文明の全体的な解釈に大きく影響した。トンプソンは、敬愛するマヤ文明に「悪いものは何も見ない」という態度でのぞみ、マヤ文明のあらゆる様相をこよなく愛したのである(Sabloff 1994:56)。次の文章は、クニルの長所を褒め称えている。

「筆者は、ベリーズ西部ソコツ村のマヤ人ハシント・クニルと36年間にわたって親交した。

私たちの友情は、マヤ人にとって極めて親密な関係を意味する、コンパドレになることで強化された。ハシントは、親切、高潔、誠実で、賃金労働に律儀に従事することをモットーとする古風な人柄であり、筆者は、彼に敬意を払い、敬愛するようになった。ハシントの生活と性格は、マヤ人の人生哲学の全縮図のようである。」(Thompson 1966:299, 筆者訳)

アメリカ人のマヤ学者マイケル・コウは、1949年にクニルを個人的によく知る機会を得て、彼のもう一つの精神的な側面を悟った。クニルは、普段は温和であるが、極めて異様な雰囲気を持ち主であり、ほとんど熱狂的な神秘主義者になる時があったという(Coe 1999:130)。トンプソンは、現代マヤ人の性格を要約して、「世の中は、持ちつ、持たれつつ」という態度が典型的な特色であると同時に、極めて宗教的でもあると記している(Thompson 1966:156)。クニルがトンプソンに与えた影響は多大であり、その現代マヤ人観は、「宗教的に傾倒」した神秘的な古代マヤ人という拡大解釈にまで導いた。

「先コロンブス期のマヤ人の一般的な性格や宗教的な傾倒は、今日と同様であったにちがいがなく、マヤ文化の大方の進路を決定した、と筆者は考えている。信心深さ、しつけ、権威への敬意は、神権政治の出現を容易にし、神官を務める階層が、被支配層の霊的な必要性を満たした限り、際立った反対はほとんどなかったといえよう。支配層は、マヤ社会において、神々と人間の仲介者という、極めて重要な役割を果たした。神官たちは、季節毎に、マヤ人の農民たちが、自分の土地や穀物に気に病む、愛情あふれる懸念を和らげることができた。神官たちは、遠く離れた、聳え立つ神殿の神秘的で、暗い部屋で、仲介者としての関係がしみ込んだ、深遠な神話的な解釈を表明した。」(Thompson 1966:302, 筆者訳)

トンプソンの現代マヤ人の個人的な好印象・先入観は、マヤ文明が、「温和なマヤ人」の性格によって形成されたという憶測をもたらした。英領ホンジュラス(現在のベリーズ)の現代マヤ人の情報提供者たちにとって、イギリス人のトンプソンは宗主国の上流階級に属する紳士の考古学者であったことは、注目に値する。つまり、トンプソンとマヤ人の友人たちの関係は、対等とはいえなかったのである。さらにマヤ人の性格が、植民地支配とともに変わってきている可能性が全く考慮されていないのが特筆されよう。

「しつけ、自己抑制の実践、共同労働、調和の精神を教え込んで、温和なマヤ人の性格が生み出された。それは、基本的に内向的だが、個人的よりもむしろ、しつけられた性格であった。この性格が、もちろんマヤ文明を形作ってきたのであり、この文明は、ひとたび確立されると、世代を越えてその性格を維持するのを促進した。」(Thompson 1966:161, 筆者訳)

トンプソンは、憶測と「事実」を明確に区別しなかった。たとえば、次のグアテマラの現

代マヤ人によるマナティーの耳骨の使用例は、確かに「興味深い」民族誌例である。しかし、ベリーズのサン・ホセ遺跡の考古資料の解釈に活用できるのか、果たして「正しい」解釈なのかは実証されていない。

「筆者は、考古資料を解釈するために、現代マヤ人の信仰や習慣に関する知識をどのように活用できるかについての興味深い事例に数年前に遭遇した。筆者は、ベリーズのサン・ホセ遺跡のあるピラミッドの頂上に埋納された、香炉1点と骨2点を発見していた。後者は、ジュゴン目マナティーの耳骨であることが判明していた。筆者には、なぜ古代マヤ人がその風変わりな海洋哺乳動物の耳骨を埋納しなければなかったのか見当がつかず、コメント抜きでこの発見について出版した。数年後に、ミシガン州フリント市の博物館長のC・M・バーバー氏が、60年前に、グアテマラのイサバル湖周辺に住む現代マヤ人が、マナティーの耳骨を細繩に通した首飾りで魔除けをしているのを目撃した、と筆者に語ってくれた。バーバー氏は、それはマナティーの鋭敏な聴覚がその最大の防御だからと考えた。バーバー氏は、民族誌の観察に基づいて、筆者の考古資料に関する正しい解釈を提供したのである。」(Thompson 1963:130, 筆者訳)

トンプソンは、「植民地時代や現代マヤ人が、町の中央広場で定期的に市場を開いている」というアナロジー（類比）から、先コロンブス期の市場の存在を類推した(Thompson 1966:69)。しかし、これは立証されていない推論に過ぎなかった。市場は、スペイン人征服期や植民地時代の文書に記録されているが、スペイン人の侵略後に発達した習慣だったのである。さらにトンプソンは、主に民族史料から復元されたアステカ文明の市場、生贄の詳細、戦争、軍事等級、学校、創造神話や末世観などを過剰に利用して、マヤ文明の解釈を補強した。アステカ文明（後1350-1521年）は、メキシコ中央高地のメキシコ盆地に位置する首都テノチティラン、テスココ、トラコパンの三都市同盟を中心に栄華を誇り、後古典期後期最大の王国を築いた文明である(青山 2007:216)。日本では「マヤ・アステカ」と同一視・混同されがちであるが、アステカ王国の三都市同盟はマヤ地域から1000km以上も離れ、マヤ文明（前600年-16世紀）の勃興よりも2000年ほど遅かった。たとえば、次のマヤ都市の市場の解釈は、実証されていない憶測の好例である。アステカ都市に「市場のための特別な建物」があったことは、マヤ都市に同様な建物が存在したことを意味しない。ティカルの広場が市場であったかどうかは、憶測にしか過ぎず、実証されていないのである。

「アステカ人は、市場のための特別な建物を有していた。マヤ都市にも、そうした建物があったと考えられる。1960年代にティカル遺跡で発掘された、持ち送り式アーチの回廊のある建物に囲まれた広場が、その1つだったのかもしれない。」(Thompson 1966:73, 筆者訳)

次の文章では、トンプソンは、アステカ人や他の古代メキシコ人の民族史料からのアナロジーに基づく類推を無批判に行い、古代マヤ人の宗教観念を復元したと明記している。マヤ人の民族史料が残存しないということは、実証的に証明できないことを意味する。トンプソンの「推定」は、「総体的に正当化」されない。

「... [古代マヤ人の宗教観念を] アステカ人や他の古代メキシコ人の史料から復元した。しかし、メキシコ中央部の人々の宗教観念は、古代マヤ人と酷似していたと考えられる。それゆえに、そうした儀礼に関するマヤ人の史料が残存していないにもかかわらず、そのいくつか、古代マヤ人の間でも普及していたと推定するのは、総体的に正当化されよう。」(Thompson 1966:223-224, 筆者訳)

トンプソンは、スペイン人が過大に誇張した、アステカ王国の生贄を過度に参考してマヤ文明の生贄を強調したが (Thompson 1966:227-229)、その解釈には無理がある。同様に、次の例では、アステカ人の末世観は、そのまま古代マヤ人に当てはまらない。

「古代マヤ人は、アステカ人のように、様々な悪影響の強力な組み合わせが時間の周期の終わりを記した時に、世界が突然終わりを告げる、と信じていたことが明らかである。」(Thompson 1966:165, 筆者訳)

トンプソンは、民族史料に基づいて、メキシコ中央高地のトルテカ人、あるいはその影響を受けた外部民族がマヤ低地に10世紀に侵入したと誤解し、この時期を「メキシコ期」(925-1200年)と呼んだ (Thompson 1966:115)。さらに古代メキシコ人が、マヤ低地北部の都市チチェン・イツァのマヤ人を征服し、後古典期初頭に新たな都市を建設したと主張した。トルテカ文明(後900-1150年)とは、メキシコ中央高地の屈指の国際都市トゥーラを首都とした都市文明である (青山 2007:187)。トンプソンは、古代メキシコ人の「悪影響」によって、マヤ人が世俗化し、軍事主義が台頭したと考えていた。

「マヤ人が古代メキシコの外来語を適用したという事実... は、トゥーラの影響下で導入された、新たな社会組織に光を当てる。神権政治社会から軍事階層の強い影響があった社会への変遷に伴った、古代メキシコ由来の以下のような外来語を見出せる... 外来語の適用は、伝統的に平和で基本的に調和を重んずる内向的な態度から、軍事的で好戦的な古代メキシコ人の影響を受けた外向的な態度への変遷を同様に示している。」(Thompson 1966:124, 筆者訳)

トンプソンは、チチェン・イツァには、「マヤ期」にマヤ様式の建物が建てられた「旧チチェン地区」、および「メキシコ期」にトルテカ様式の建物が建てられた「新チチェン地区」

の二地区があった、と想定していた。民族史料の伝承によれば、967年から987年の間にトルテカ文明の首都トゥーラのトピルツイン王一行が、東方のチチェン・イツァに至ったとされる (Thompson 1966:98)。近年の層位的発掘調査、土器分析やAMS炭素14年代によって、侵略仮説は否定され、「マヤ期」と「メキシコ期」という時期区分、さらに「旧チチェン地区」と「新チチェン地区」という仮想地区が、実際には存在しなかったことが明らかになっている (Sabloff 1994:128)。屈指の国際都市チチェン・イツァは、後古典期ではなく、古典期後期・終末期 (700-1000年) にマヤ低地北部で最大の広域国家の中心地として繁栄を極めた。チチェン・イツァの支配層は、トルテカ文明だけでなく、他の様々な文化と広範に交流していた。彼らは伝統的なマヤの神々を崇拝するだけでなく、遠距離交換網に参加し「国際的な」石彫様式を導入して、王権を正当化・強化したのである。

トンプソンは、文献史料をより慎重に取り扱って考古資料を解釈すべきであった。なぜなら、先コロンブス期・植民地時代のマヤ人は、歴史、神話、伝説、予言、政治的宣伝を明確に区別しなかったからである。たとえば、16世紀の『ユカタン事物記』は、スペイン人司教ランダが書き残した、最も重要なスペイン語史料である (Tozzer 1941)。しかし、マヤ人を強制的かつ徹底的にカトリックに改宗したランダの史料には、多くの主観的な見方、誤解や憶測も含まれている。一方、ランダのマヤ人情報提供者や先住民文書を書き残したマヤ人たちの文化は、スペイン植民地文化の影響で大きく変容していた。時間を循環的に捉えたユカタン地方のマヤ人は、歴史的事実、歴史は13カトゥン (約256年) 毎に繰り返すという予言、伝説などを明確に区別せず、政治的宣伝のために歴史を改ざんした。さらに、ランダの主要情報提供者のなかには、シウ家や、後古典期・植民地時代のユカタン半島の名門でマヤパンを支配したとされるココム家の末裔も含まれており、それぞれ異なった独自の「歴史」をランダに伝えた。また『チュマイェルのチラム・バラムの書』には、後古典期と植民地時代のユカタン半島西部の名門シウ家の「歴史」が記されたのに対して、『ティシミンのチラム・バラムの書』にはユカタン半島東部の名門イツァ家のそれが書かれたのである (Edmonson 1982, 1986)。

総体的に、考古資料を解釈するための方法論が未発達であったといえよう。トンプソンの仮説は、実証的な調査手順を用いて検証されなかった。トンプソンは、自らのバイアスや現代マヤ人の個人的な好印象が、マヤ文明の解釈に影響を与えていたことを認識していなかった。トンプソンは、民族誌や民族史料からのアナロジーに基づく類推を無批判に行い、多くの場合、憶測によって遺構や遺物を主観的に解釈したのである。

3.3. 「周辺地域から孤立して発展した、ユニークで、静態的で均質な文明」

トンプソンは、マヤ文明が「熱帯雨林というユニークで比較的孤立した環境において、メソアメリカの周辺地域からの影響をあまり受けることなく発展した、変化の少ない静態的かつ均質な文明」であると誤解した。たとえば、古典期前期のメキシコ高地の大都市テオ

ティワカンとマヤ低地の支配層の交流を軽視していた。マヤ文明は、メソアメリカの周辺地域との交流を通して徐々に発展し、大きく変化し続けた動態的な文明であった。近年の調査によって、古典期前期のマヤ低地の諸王朝は、トンプソンが推測していたよりも、テオティワカンの支配層と密接かつ直接的に交流していたことが明らかになっている。

「[グアテマラ高地のカミナルフユ遺跡の] ピラミッドは、傾斜した壁面の真上に垂直の枠付きのパネルを嵌め込んだ、テオティワカン独特の建築様式で建てられた... この様式の建築は、現在 [1960年代半ば] までに、メキシコ期のチチェン・イツァ遺跡を除いて、マヤ低地では確認されていない。」(Thompson 1966:85, 筆者訳)

「テオティワカン独特の建築様式」は、タルー・タブレロ様式建築と呼ばれ、テオティワカンでは、後150-200年頃から使われた、傾斜壁（タルー）の真上に垂直の枠付きパネル（タブレロ）を嵌め込んだ特徴的な建築様式である。その後の調査によって、マヤ高地では、ソラノ遺跡、マヤ低地南部では、ティカル遺跡、リオ・アスル遺跡、コパン遺跡、マヤ低地北部では、バカン遺跡、ツイビルチャルトウン遺跡、チュンチュクミル遺跡、アカンケフ遺跡、コバー遺跡、プウク地方のオシュキントック遺跡やチャックII遺跡などで確認されている。テオティワカンの支配層が実際にマヤ低地の諸都市を訪れたことは確実であり、マヤ文字の解読によれば、たとえば378年にティカルでは、テオティワカンの支配層のシヤフ・カックという人物の政治的協力によって大きな政変があった (Martin and Grube 2000:29)。ホンジュラスの大都市コパンでは、426年にテオティワカンとの関係が示唆されるキニッチ・ヤシュ・クック・モ王が王朝を創始した (Martin and Grube 2000:193)。こうした外部勢力は少数派であり、長期間にわたってマヤ都市の政治に介入することはなかったと考えられる。ティカルやコパンの場合でも、遺物、建築、画像の大部分は地元の様式であったことに注意しなければならない。外来文化は、圧倒的多数を占める地元のマヤ人の文化に取り込まれ、権威の象徴として王権を強化するために利用され、マヤ文明を創造していったのである (青山 2005:154)。

マヤ文明は、多くの文化要素を共有しながらも、言語・民族・生態環境の多様性、文化的に大きな地域差を有した。トンプソンの「静態的かつ均質な」マヤ文明観は、『マヤ文明の興亡』に登場する架空のマヤ低地の旅人の記述に明瞭である。

「このように旅人は、旅路で何度もこうした小さな集落を目撃し、村、儀式センター、トウモロコシ畑、綿畑、リュウゼツラン畑も時おり見たことだろう。旅人は、あちらこちらで猟師たちに遭遇し、宗教儀礼を時おり目撃し、大賑わいの市場を通り抜けたかもしれない。旅人は、旅の終わりに、自分が見てきたことを回想して、全体的な風景の均質性に気付くだろう。アメリカのメイン州からカリフォルニア州までのガソリンの広告、ガソリン・スタンドやソーダ水売り場が、看板や建物には地域差はあるものの、同様なと全く同じなのである。」

(Thompson 1966:49, 筆者訳)

こうした「静態的で均質なマヤ文明」観には、20世紀前半のアメリカ人類学を支配したボアズ学派の影響を見逃せない。ボアズ学派は、文化の規範的・静態的な見方を容認し、文化の変異性を軽視した上に、極めて観念的であった。「共有観念」、「文化の均質性」、「典型的な精神の型板 (ideal mental template)」などを強調したために、ある文化の研究は、一人の情報提供者を調査するだけでも事足り、文化要素の長大な一覧表で特徴付けられた (Boaz 1940)。個別記述主義であった反面、人類学の基本である比較研究を否定した。そして、歴史研究における各社会の個別な歴史的な脈絡を強調し過ぎたために、極端な歴史的個別主義に陥った。トンプソンは、ケンブリッジ大学で人類学を専攻したにもかかわらず、マヤ文明と他の古代文明を比較研究して、その共通性や類似性を積極的に論じなかった。むしろ、彼の愛するマヤ文明の独自性やユニークさを強調した。マヤ文明の調査研究は、トンプソンが所属したワシントンのカーネギー研究所をはじめとするアメリカ合衆国の研究機関によって主に行われた。トンプソンの「ユニークで、均質で静態的な」マヤ文明観は、当時のアメリカ合衆国の学問的パラダイムを支配したボアズ学派のアメリカ人類学への影響に負うところが大きかったのである。

3.4. 「時間の哲学、天文学、暦に没頭した神秘的な神官」と碑文の非個人性

トンプソンは、一般書において「時間の哲学、天文学、暦に没頭した神秘的な神官」を強調し、「マヤ文字の碑文には個人の歴史は記録されなかった」と主張した。その後の研究によって、王朝史が解読され、古典期には専門の神官は存在せず、王や貴族が神官の役割を果たしたことがわかっている (Inomata and Houston 2001)。神聖王であったマヤの王は政治指導者であり、国家儀礼では最高位の神官になり、戦時には軍事指揮官になった。また、日本の将軍や大名と同様に、マヤの王は複数の后をもっていた。日本史と同様に、有力な王朝と同盟関係を結ぶために政略結婚や訪問が行われることもあった。トンプソンは、マヤ文字研究に生涯をかけて従事したにもかかわらず、主に暦や天文学に関する部分だけしか解読できなかった (Thompson 1950)。その結果、古代マヤ人が「時間の哲学」に運命を支配されていた神秘的な人々であり、碑文の内容は、天文学、予言や暦などの秘儀的な事柄だけであった、と拡大解釈してしまったのである。トンプソンは、1950年に出版された『マヤ文字 (*Maya Hieroglyphic Writing*)』の初版に、次のように書いた。

「石碑に記録されたマヤ文明の日付は、歴史的な出来事と関連し、あるいは個人の偉業さえをも物語るかもしれないと、一部の学者が提唱している。筆者には、そのような可能性は全く考えられない。石碑の日付は、時間の旅路の諸段階を、そうした荘厳なテーマに崇拜の念をいだき、確実に述べている。筆者は、時間の無限の進歩が、マヤ文明の宗教の究極の神秘で

あり、人類史において類例のないほど古代マヤ人の思想にみなぎったテーマであったと考える。こうした背景において、個人の記録の余地などない。というのは、時間の果てしない広がり比べれば、人間とその行為は微々たるものだからである。戦争や平和、結婚やその表明などの詳細を、荘厳な時間の周期の流れに追加するとは、あたかもイタリアのルネッサンス期の彫刻家ドナテルロ（1386?-1466年）作のダビデ像に、一人の旅行者がイニシャルを刻もうとしているかのようなのである。石碑や他の石造記念碑は、時間の経過を告げた。つまり、時間の流れを記すために建立されたのである。」（Thompson 1950:155, 筆者訳）

トンプソンは、『マヤ文明の興亡』の第2版においても、古代マヤ人の「時間の哲学」の重要性を強調し続けた。

「古代マヤ人の哲学は、総体的に古代アテネ人のそれと極めて似通っている。なぜならば、『あらゆることの調和』が、古代アテネ人の生活と同様に、古代マヤ人の生活の秘訣だったからである。しかし、古代マヤ人の哲学は、西洋哲学と全く性質を異にする観念も兼ね備えていた。マヤ文明の壮大な観念は、時の流れである。それは、広義には永遠の神秘に関する観念であり、狭義には世紀、年、月、日に相当する時間の区分に関する観念だった。時間の規則的な循環が、古代マヤ人の心を魅了した。無限の未来から無限の過去への決して絶えることのない時の流れが、古代マヤ人を驚異の念で一杯にしたのである。」（Thompson 1966:13, 筆者訳）

ロシアからアメリカに移住した女性マヤ学者タティアナ・プロスコウリアコフは、1960年にピエドラス・ネグラス遺跡やヤシュチラン遺跡の碑文のなかに「盾ジャガー王」、「鳥ジャガー王」、「生誕」、「即位」など王朝史に関するマヤ文字を同定した。そして、碑文には歴史も記録されたという、マヤ文明研究の金字塔的な学説を打ち建てたのである（Proskouriakoff 1960）。トンプソンは、1960年に出版された『マヤ文字』の第2版で、マヤ文字の碑文の非個人性という自説を修正する必要性をほのめかした。

「プロスコウリアコフの諸論文によって、マヤ文明の石造記念碑の碑文は非個人的である、という筆者の学説をいずれ見直すことになるかもしれない。」（Thompson 1960:v, 筆者訳）

そして、『マヤ文明の興亡』の第2版では、少なくとも一部の碑文には支配層の個人の歴史が書かれていることを認めた。

「1960年代になって、一部の——全部ではないにしても——マヤ低地の遺跡の石造記念碑には、支配者の生誕や始まり、即位、戦争の勝利や捕虜の捕獲、さらに妻子の詳細に関する事

柄などが記録されているという、説得力のある論議が展開された。そうした解説は正しく、筆者は、碑文の内容が、天文学、予言や暦に関する、非個人的な情報だけであったという、かつての自説を否定するものである。」(Thompson 1966:62, 筆者訳)

トンプソンは、1971年に出版された『マヤ文字』の第3版で、マヤ文字の碑文の非個人性という自説が誤りであったことを遂に認めた。

「これまでの研究によって、筆者がかつて提唱した、マヤ文字の碑文の非個人性に関して広く支持されている学説が、完全に間違いだったことが明らかである。」(Thompson 1971:v, 筆者訳)

その一方で「時間の哲学に没頭した神秘的な神官」という考えは、根本的に修正しなかった。『マヤ文明の興亡』の第2版では、神官を兼ねる天文学者は、碑文に主に「時間の流れ」を記録したのであり、他の記録は二次的に過ぎないとしている。

「マヤ文字の碑文は、主に時間の流れ、各時間の区切りを支配する神々の名前や影響力、こうした事柄に関する神官を兼ねる天文学者の蓄積した知識を記録するためにあったのである。他の碑文の記録は、二次的に過ぎなかった。」(Thompson 1966:197, 筆者訳)

トンプソンは、「歴史上のいかなる民族もマヤ人ほど時間に夢中にはならなかったのである」、このような異例の問題に関する哲学を発展させた文化は、他になかったのである」(Thompson 1966:162, 筆者訳)と断言した。「時間の哲学」の重要性という誤解に基づき、古代マヤ人の特殊性を過度に強調し続けたのである。

3.5. 「マヤ文字には音節文字はない」

マヤ文字は、漢字と仮名文字からなる日本語とよく似ており、一字で一単語を表す表語文字、および一字で一音節を表す音節文字からなる。マヤ文字は全部で4万-5万あり、673ほどの文字素(漢字のヘンやカンムリに相当)を組み合わせて各文字を構成した(Marci and Looper 2003)。トンプソンは、生涯にわたって「マヤ文字には音節文字はない」と主張し続けた。単純な表音文字の存在は認めていたが、むしろ表意文字が広範に用いられたと考えた。ロシア人言語学者クノローゾフは、1950年代初頭からマヤ文字の先駆的研究の成果を発表し、16世紀にランダ司教が『ユカタン事物記』に書き残した、スペイン語とユカテコ語を結びつけた「アルファベット」をもとに、マヤ文字には音節文字があることを示し、その音節的解説に成功した(Knorosov 1958)。しかし、当時は冷戦時代であった。トンプソンをはじめとする大部分の西側社会の研究者は、これを「マルクス・レーニン主義」的学説として受け入れ

なかったのである。トンプソンは、クノローゾフの音節的解読を当初から批判し続けた。『マヤ文明の興亡』の第2版にも、痛烈な批判が書かれている。

「マヤ文字は、部分的に音節文字であり、アルファベットのようであるという主張がなされているが、筆者はこの見方を承認し難い。遠く離れたシベリアの電子コンピュータを使って、そうした主張が支持されているが、コンピュータは、ソーセージ製造機のようなものである。製品は、何が原材料であるかにかかっている... この種の『解読』は、マヤ文字を解読する前に、マヤ人の民族学や言語学の研究をいかに必要とするかを示す一例である。あるロシア人は、僅か2カ月の研究でマヤ文字の解読に成功した、と模範的な謙虚さで世界に宣言した。一方、この人物は、先学たちが20世紀の大部分を通じて、ほとんどあるいは全くマヤ文字を解読できなかった、と付け加えた。もう1人のロシア人は、先学たちの努力を同様に軽蔑し、先学たちの解読を引用することなく、マヤ文字の解読をマルクス・レーニン主義的な研究法で成し遂げたのである。」(Thompson 1966:195-196, 筆者訳)

トンプソンは、クノローゾフの研究業績を執拗に攻撃し、生涯をかけて否定し続けた。その大きな理由の一つは、彼の共産主義やソ連に対する個人的な嫌悪感であったかもしれない。コウは、トンプソンが音節文字の存在に気付いていたにもかかわらず、ひとたび宣戦布告した以上、後には引けなかった可能性を指摘している(Coe 1999:166)。トンプソンは、『マヤ文字』の第3版の序文に、個人的な感情を露わに次のように述べた。

「重要な点は、暗号を解くのと同様に、マヤ文字が音節的に新しく解読される毎に、マヤ文字解読の量が加速されるはずだと、筆者は考える。ソ連の紋章入りの官服を着た伝令官たちが、ファンファーレを鳴らしつつ音節的な解読を喧伝してから19年が経過した。ブルジョア学者が1世紀近く解読できなかったマヤ文字が、マルクス・レーニン主義的な研究法によって解決されたというのである。もしそれが本当であれば、筆者は喜んでハイゲート墓地にあるマルクスの墓参りをして、感謝の意を表したいと思う。ああ！音節的な解読が成功すればマヤ文字の川に注ぎ込むはずの解読の流れは、現れていない。マヤ文字の川は、ずっと干上がったままなのである。」(Thompson 1971:vi, 筆者訳)

冷戦と最高権威の個人的な嫌悪感が、学術的な発展を妨げたのは悲しい限りである。クノローゾフの研究からほぼ20年後、イェール大学の言語学者ラウンズベリーは、1973年にパレンケ遺跡のパカル王(615-683年統治)の名前を音節的に解読することに成功し、マヤ文字の音節的解読の有効性を西側世界に知らしめた(Lounsbury 1974)。マヤ文字の音節的解読は、トンプソンの死後の1980年代以降、クノローゾフの先駆的な業績をもとに、著しい発展を遂げた。音節文字の体系化が進み、まだ不完全ながら、日本語の50音表のような音節文字表が作

成されている。碑文には実在した王や貴族の偉業・歴史に関する情報が、トンプソンの想定よりもはるかに多く含まれることが明らかにされている。

3.6. 「戦争のない平和な古典期マヤ文明」

トンプソンの神秘的なマヤ文明観の一大特徴は、古典期マヤ文明を大規模な「戦争のない平和な文明」と誤解していたことである。トーマス・ガンとトンプソンは、1937年に『マヤの歴史 (*The History of the Maya*)』という著名な一般書において、次のように書いた。

「マヤ人は、石碑に刻まれた図像から判断すると、世界史上で最も好戦的でない集団の一つであった。」(Gann and Thompson 1937:63)

トンプソンの「平和な古典期マヤ文明」観は、その後も基本的に修正されなかった。「調和した生活、温和」、「隣人の短所に寛容な精神」が、現代マヤ人の特徴であると断定した。

「マヤ人の哲学は、デルフィの神殿に刻まれた『汝自らを知れ』という箴言に、最もよく要約されている。調和した生活、温和、そして、『世の中は、持ちつ、持たれつつ』という表現にあるような、隣人の短所に寛容な精神の十分な理解が、現代マヤ人の特徴である。」(Thompson 1966:158, 筆者訳)

トンプソンは、18-19世紀にユカタン半島北部の各地で書き残された、マヤ先住民文書『チラム・バラムの書』の研究に基づき、こうした現代マヤ人の人生哲学は、古代マヤ人にも当てはまると結論した(Thompson 1966:158-159)。さらにトンプソンは、古典期の都市国家間の関係が、「全体的に極めて友好的」であり、「大規模な戦争はなかった」と考えた。

「古典期の都市国家間の関係は、全体的に極めて友好的であったと考えることができるだろう。諸王は交流して、同様な幼児教育、その後の教育、芸術的な嗜好、宗教的な信仰を共有したのだろう。これは、交流関係がいつも友好的であった、という結論には必ずしも至らない。筆者は、国境線を巡るかなり常時的な軋轢によってしばしば引き起こされた小規模な紛争や、人身犠牲者を都市国家に提供するために周辺部を時おり急襲したと考える。しかし、筆者は、大規模な戦争が定期的に行われたという証拠はないと思っている... 古代マヤ人のモットーは『世の中は、持ちつ、持たれつつ』であった。筆者は、小都市国家が大都市国家によってそれほど脅かされていたとは思わない。」(Thompson 1966:158-159)

ボナンパック遺跡の宮殿の壁画や石造記念碑には、明確に古典期の戦争の場面が表現されているにもかかわらず、トンプソンは、小規模な襲撃の証拠と考えた。なぜならば、戦争に関する図像は、トンプソンの古典期マヤ人の温和で平和な性格や行動についての見方・先入

観と正反対だったからである。

「防御遺構の欠如、大部分の古典期マヤのセンターが平地にあるという事実、そして戦争の証拠がほとんどないということ（ボナンパック遺跡の戦闘の壁面に示されているのは、真の戦争ではなく、むしろ襲撃であったことが明らかである）は、古典期を通じて概して平和であったという仮説を立証している。」（Thompson 1966:94, 筆者訳）

その後の調査によって、ティカル、アグアテカ、ドス・ピラス、カラクムルやエック・バラムなど、一部の古典期マヤ都市では、防御壁などの防御遺構が確認されている (Demarest et al. 1997)。それらは、戦争に関連する多くの碑文や図像資料とともに、マヤ文明が決して平和な文明ではなかったことを示している。王および支配層書記を兼ねる工芸家は、戦士でもあった (Aoyama 2005, 2007)。都市を中心に初期国家群が発達し、戦争や権力闘争が繰り広げられていた。戦争では王がしばしば捕獲されて人身供犠にされ、戦争の勝敗は都市の盛衰に大きく影響した。たとえば、562年にはカラクムル王がティカルに戦争で勝利したが、695年にはティカル王がカラクムルにリベンジを果たした (Martin and Grube 2000:44)。世界各地で農耕定住村落が確立すると、集団間で戦争が起こった。旧大陸の「四大文明」や日本の弥生社会と同様に、マヤ文明も例外ではなかったのである。

筆者は、「戦争のない平和な古典期マヤ文明」という見方も、当時の欧米の社会・時代背景やトンプソンの個人的な経験・印象に大きく影響されていたと考える。20世紀前半の欧米社会は、第一次世界大戦、社会主義革命、大恐慌時代など、様々な社会不安に揺れていた。さらにトンプソンは、第一次世界大戦の従軍中に負傷した。「戦争のない平和な文明」観は、トンプソンや一般の欧米人の「マヤ文明だけは平和であって欲しい」という、意識的なあるいは無意識的な願いを反映していたのではないだろうか。言い換えれば、産業文明や都市化の発展とともに、第一次世界大戦を経験した20世紀半ばの欧米社会のアンチテーゼ、あるいは「調和した生活」を喪失した欧米人のノスタルジアといえよう。

3.7. 「農民の反乱」

トンプソンは、「農民の反乱」によって、9世紀にマヤ低地南部の諸都市が「崩壊」したという学史上有名な学説を唱えた。この現象は、今なお「神秘的なマヤ文明の謎の崩壊」としてマスメディアに取り上げられることが多く、多くの人の関心を集めてやまない。

「『聖職者を兼ねる地主』と貴族支配層に対する一連の農民の反乱があった... こうした反乱は、建設事業の奉仕および増大する非農民たちへの食料生産がさらに強要されることによって引き起こされたのかもしれない。」（Thompson 1966:105, 筆者訳）

しかしながら、「崩壊」という表現は、急激に全てがなくなってしまうことを指し、不適切である。最近の調査によれば、マヤ低地南部の多くの都市は、8世紀から10世紀にかけて徐々に衰退したことがわかっている。しかもそれは、古典期マヤ文明の部分的な衰退であった。マヤ低地南部の一部の都市が同時期に繁栄し続け、マヤ低地北部の多くの都市が全盛期を迎えたのである。つまり古典期マヤ文明は、9世紀に全体としては「崩壊」していなかったのである。

「古典期マヤ文明の衰退」は、単一の要因で説明することはできず、複数の要因の相互作用があったと考えられる(青山 2005:234)。しかも、「農民の反乱」を示す直接的な証拠はない。現在のところ、マヤ低地南部の古典期マヤ文明衰退の直接的な要因として最も重要視されているのは、人口過剰と農耕による環境破壊、気候の変化や戦争である。気候の変化に関しては、マヤ低地南部の多くの都市が徐々に衰退した750-950年にかけて降雨量が減少したとされる。周囲に大河川がなく、飲料水や農業用水を雨水に依存していた大都市ティカルやカラクムルでは、約200年間の降雨量の減少は、人口過剰による環境破壊や戦争など他の要因と相互に作用して、衰退の重要な要因の一つといえよう。

ベッカーは、「農民の反乱」学説が、主にトンプソンの社会階級、時代背景、個人的な経験から生み出されたとする(Becker 1979:12)。20世紀前半には、ロシア革命に引き続いて、旧ソビエト連邦が確立された。また、上述のように、トンプソンは第一次世界大戦の従軍中に負傷し、戦後アルゼンチンに移住しそこにあるトンプソン家の大農場で4年間働いた。アルゼンチンでは明確な階級区分が存在し、多くの労働問題を抱え、トンプソンは流血を伴う農民のストライキや階級闘争を何度も見聞した。たとえば、トンプソンがアルゼンチンに到着した翌年の1919年には、「ボリシェヴィキ」外国人の大虐殺が起こった。大地主のトンプソン家は、左翼運動から攻撃される立場にあった。つまり、「農民の反乱」学説は、上流階級に属したトンプソンの共産主義革命への個人的な恐怖を投影していたと考えられよう。

3.8. 「後古典期は退廃期」

古典期中心主義のトンプソンは、古典期をマヤ文明の絶頂期と考え、後古典期(1000年-16世紀)をマヤ文明の「退廃期」とみなしていた。マヤパン遺跡は、ワシントンのカーネギー研究所が、最後の大規模な調査(1949-1955年)を実施したマヤ低地北部の都市遺跡である。その調査では、20世紀前半と同様に、支配層の諸側面に焦点が当てられた。あらゆる種類の住居跡をサンプリングすることはなく、大建造物や貴族の邸宅跡の発掘調査が中心であった(Pollock et al. 1962)。さらに、トンプソンは、マヤパン遺跡の芸術・建築に対する個人的な嫌悪感を前面に出し、後古典期マヤ文明に大きなバイアスのかかった評価を下した。

「マヤパン遺跡では、建築の退廃と並び、石造彫刻と土器の極めて顕著な退廃があった... 後古典期後期のマヤパン遺跡の彫刻は最悪であり、見るも哀れに粗雑なのである。土器は、単

調を極める。地元で生産された土器は、出来が悪く、多彩色土器は全くない... 石器の生産技術もまた低下し、古典期の素晴らしいチャート製石器よりもはるかに劣っていた。古代マヤ史の最後にあたる、後古典期後期のあらゆる芸術の退廃には、本当に心が痛む。筆者は、これが神政政治から世俗的・軍事的文化に変遷した結果として生み出された、大きな文化的な混乱の表れだと思う。」(Thompson 1966:145, 筆者訳)

後古典期マヤ文明の芸術や建築には、確かに古典期の壮麗さはなかった。トンプソンは、マヤパンの石造建築に古典期のような切石がないために、後古典期の建築の「退廃」の典型例とみなした。しかしトンプソンの目には安っぽく見えても、往時は厚い漆喰が荒っぽく加工した石を覆っていたのであり、十分に機能していた。その一方で、遠距離交換網が発達し、複雑な政治経済組織は活気にあふれていた。商業志向の支配層は、大建造物の建設・誇示には以前ほど関心がなかったのである (Sabloff 1994:134)。後古典期マヤ人にとって、宗教は古典期と同様に重要であり、多くの神々が信仰された。しかし、宗教は古典期のように中央集権化されず、一般的に都市中央部の大神殿ピラミッドよりも、むしろ家族の聖廟が拜まれた。神々を造形した精巧な土器の香炉が大量生産されることによって、被支配層にも流通するようになった。いうまでもなく、大量生産は、洗練された経済組織を要する専門技術である。マヤ文明は、16世紀にスペイン人が侵略するまで、社会全体としては発展し続けた。芸術と建築の「退廃」は、必ずしも社会全体の衰退を意味しない。トンプソンのような解釈は、たとえば、江戸時代の城郭の本丸・二の丸・三の丸と現代の画一的な家屋が立ち並ぶ住宅地区の芸術・建築面を比較して、「日本文化は退廃した」と結論するようなものである。つまりトンプソンは、カーネギー研究所の支配層中心なマヤパン遺跡の考古学調査によって収集された、バイアスのかかった考古資料の解釈に、自らのバイアス・個人的な嫌悪感が影響を与えていたことを認識していなかったといえよう。

4. 結論

エリック・トンプソンの『マヤ文明の興亡』は、マヤ文明に関する20世紀最大のベストセラーであり、研究史における意義は極めて大きい。マヤ・オリエンタリズムの形成を理解する上でも欠かせない。トンプソンの死後の調査研究によって、人口が希薄な「空白の儀式センター」の「都市なき文明」、「神官支配層と農民の二階層社会」、「古代メキシコ人の侵略」、「周辺地域から孤立して発展した、ユニークで、静態的で均質な文明」、「時間の哲学、天文学、暦に没頭した神秘的な神官」、「マヤ文字には音節文字はない」、「戦争のない平和な古典期マヤ文明」、「農民の反乱」、「後古典的は退廃期」などの、トンプソンの学説は否定されている。しかし、トンプソンが収集した考古資料、民族史料やマヤ文字の研究は、今日なお大きな学術的な価値を有している。人文社会科学には、「絶対的な真理」はなく、つねに発見が繰り返され新たな仮説が生み出されていくものなのである。数多くのマヤ学者が、最高権威

だったトンプソンの学説を実証的に否定することによって、マヤ文明の研究は大きく進展したといえよう。困難な野外条件に立ち向かい、19世紀と20世紀前半のマヤ学の成果を総合化したトンプソンの偉大な研究業績の上に立って、より客観的でより科学的なマヤ考古学が発展したのである。

イギリス人のトンプソンが、野外調査の多くを当時「大英帝国」の植民地であった英領ホンジュラス（現在のベリーズ）で実施したという事実は、特筆に値する。トンプソンは、アメリカのシカゴ自然史野外博物館やワシントンのカーネギー研究所に所属したが、アメリカ合衆国は、20世紀以来、中央アメリカ諸国に間接的な植民地支配に近い軍事的・政治的・経済的な権力を行使して、帝国主義的なヘゲモニー関係を維持している。マヤ・オリエンタリズムは、植民地主義や帝国主義という力関係の上に形成されたイメージの一つであった。考古学者は、考古資料の実証的な研究に基づいて、あたかも過去を「客観的に」研究しているかのように見えるが、現代社会から超越した存在ではない。考古学者も「時代の子」なのである。自らのもつさまざまなバイアスから逃れられず、過去の文化や社会を主観的にしか理解できない。こうしたバイアスとしては、政治的・経済的・文化的な権力格差の他に、文化的・歴史的背景、先入観、人種偏見、人間観、社会観、宗教観、パーソナリティ、国籍、ジェンダー、年齢、学歴、学問的パラダイム（大枠）、社会階級、時代の強制力などが挙げられよう。問題なのは、トンプソンをはじめとする初期の欧米マヤ学者が、自らのバイアスを認識せずに考古資料を主観的に研究したことである。

新しいマヤ文明観では、(1) 都市、(2) 初期国家、(3) 文字、(4) 神聖王、(5) その一部が王陵である神殿ピラミッドなどの巨大な記念碑的建造物、(6) 洗練された美術様式、(7) 貧富・地位の差異、(8) 農業を基盤とした生業、(9) 戦争、(10) 政略結婚といった、旧大陸の諸文明との共通性も多く認められる（青山 2005:294）。総体的に、トンプソンは、マヤ文明の神秘性や特殊性を強調したのに対して、新しいマヤ文明観では世界の他の古代文明との比較研究を重視し、共通性や比較しうる特徴も強く認識されている。神秘的なマヤ文明観は、1960年代以前、欧米の専門研究者と西洋社会の社会的要求の交差点として、一般の人々にも「事実」として広く受け入れられ、その影響は、日本のマヤ文明に関する一般書やテレビ番組にも強くみられる。つまりトンプソンの死後も、神秘性を過度に強調した古いマヤ文明観が一人歩きして、マヤ・オリエンタリズムの再生産を助長しているのである。一部の非良心的なマスメディアが、テレビの視聴率や本・雑誌の売り上げを稼ぐために、「失われた文明」、「世界七不思議」、「神秘と奇跡の文明」、「マヤの予言」、「マヤ暦の宿命的終末論」、「マヤ文明の謎の崩壊」などといった、神秘的で謎の文明観を捏造・再生産し、謎・不思議・神秘を求める現代の日本社会が消費し続けている。

日本のマヤ・オリエンタリズムの最大の原因は、世界史の教科書で、コロンブス以前の南北アメリカ大陸の文化や歴史に関する記述が質量ともに極めて貧弱なことである。アメリカ大陸の多様な古代文明を同一視・混同する「インカ・マヤ・アステカ」シンドロームは、西

洋中心主義的な世界史の教科書によって形成・助長されてきたといっても過言ではない。教科書では、15世紀からの大航海時代にヨーロッパ人が征服した「新大陸の古代文明」として総称され、アメリカ大陸の諸文明が明確に区別されていないことが問題である。しかも、コロンブス以前の南北アメリカ大陸の文化や歴史に関する記述は、旧大陸の「世界四大文明」と比べて極めて少ない。ヨーロッパの侵略戦争に敗北を喫した「新大陸の古代文明」は、あたかも「四大文明」よりも重要ではないかのような、偏った歴史観が見え隠れする。日本の「世界史」という教科は、東洋史と西洋史を中心に成り立っている。そして、アメリカ大陸の古代文明を「発見」した西洋人のイメージが強く反映されている。たとえば、ヨーロッパ人が驚嘆し、征服事業の正当化のために、その規模を誇張した「生け贄」（実際はそれほど行なわれていなかった）など、古代文明の一側面が過度に強調されている。これはたとえるならば、欧米の世界史の教科書において、武士の切腹だけが過大に取り上げられるとか、西洋史で中世の魔女狩りだけが大きく誇張されているようなものである。「世界史」という教科によって知らず知らずのうちに、西洋中心的な「歪められた」世界史が日本人の間に埋め込まれてきたというのは、ある意味で非常に恐ろしいことだとはいえないだろうか。吉田栄人が述べているように、マヤ・オリエンタリズムを「商品」として流通しているのは、こうした「歪められた」世界史を植えつけられた、かつての高校生たちなのである（吉田 2006:16）。

「歪められた」マヤ文明観を修整するために、マヤ・オリエンタリズムを脱構築しなければならない。歴史教育と研究成果の普及は、研究者の重要な使命である。古代アメリカ文明の研究者が丸丸となって、世界史の教科書における先コロンブス期のアメリカ大陸に関する貧弱な記述の改善に向けて努力していかなければならない。同時に、日本社会に極めて大きな影響を与える、古代アメリカ文明に関するテレビ番組や新聞報道などにも機会があれば、良識の目を光らせながら、より積極的に関与して「歪められた」文明観を公の場で訂正していかなければならない。さらに、現時点における最新の研究成果を、国内だけでなく、現地や諸外国でスペイン語や英語の学術雑誌論文として出版するとともに、一般書などを通じて日本社会にわかりやすく還元し続け、学術研究と一般社会のもつ知識の乖離を狭めるべく努力しなければならない。世界六大文明を構成した、マヤ文明を含むメソアメリカ文明およびアンデス文明の適切かつ十分な記述ぬぎに、「真の世界史」とはいえない。人類史を正しく再構成するためには、旧大陸と新大陸の古代文明を対等に位置付けなければならない。バランスの取れた「真の世界史」を学ぶためには、先コロンブス期のアメリカ大陸の歴史の質量ともに充実した記述が欠かせないのである。

引用文献

- 青山和夫2000「新しい古代マヤ文明観から異文化理解を考える：“マヤの水晶ドクロ”のいかさま」『科学』70(3):170-174.
- 青山和夫2001「古代マヤ文明観の変遷とその現代的位置付け」茨城大学人文学部紀要『人文学科論集』35:1-28.
- 青山和夫2005『古代マヤ 石器の都市文明』京都大学学術出版会.
- 青山和夫2007『古代メソアメリカ文明 マヤ・テオティワカン・アステカ』講談社.
- Aoyama, Kazuo 2005 Classic Maya Warfare and Weapons: Spear, Dart and Arrow Points of Aguateca and Copán. *Ancient Mesoamerica* 16:291-304.
- Aoyama, Kazuo 2007 Elite Artists and Craft Producers in Classic Maya Society: Lithic Evidence from Aguateca, Guatemala. *Latin American Antiquity* 18:3-26.
- Becker, Marshal J. 1979 Priests, Peasants, and Ceremonial Centers: The Intellectual History of a Model. In *Maya Archaeology and Ethnohistory*, edited by Norman Hammond and Gordon R. Willey, pp. 3-20. University of Texas Press, Austin.
- Boaz, Franz 1940 *Race, Language, and Culture*. Macmillan, New York.
- Coe, Michael D. 1999 *Breaking the Maya Code*. Revised Edition. Thames and Hudson, New York. (『マヤ文字解読』武井摩理・徳江佐和子訳, 創元社, 2003年)
- Demarest, Arthur, Matt O'Mansky, Claudia Wolley, Dirk Van Tuerenhout, Takeshi Inomata, Joel Palka, and Héctor Escobedo 1997 Classic Maya Defensive Systems and Warfare in the Petexbatun Region: Archaeological Evidence and Interpretation. *Ancient Mesoamerica* 8: 229-253.
- Edmonson, Munro 1982 *The Ancient Future of the Itza: The Book of Chilam Balam of Tizimin*. University of Texas Press, Austin.
- Edmonson, Munro 1986 *Heaven Born Merida and Its Destiny: The Book of Chilam Balam of Chumayel*. University of Texas Press, Austin.
- Gann Thomas, and J. Eric Thompson 1937 *The History of the Maya: From the Earliest Times to the Present Day*. Charles Scriber's Sons, New York.
- Hammond, Norman 1994 Foreword. In *Maya Archaeologist*. 1994 Edition, J. Eric. S. Thompson, pp. ix-xiv. University of Oklahoma Press, Norman.
- Inomata, Takeshi, and Stephen Houston (eds.) 2001 *Royal Courts of the Ancient Maya*. 2 vols. Westview Press, Boulder.
- Knorosov, Yuri V. 1958 The Problem of the Study of the Maya Hieroglyphic Writing. *American Antiquity* 23:248-291.
- Lounsbury Floyd 1974 The Inscriptions of the Sarcophagus Lid at Palenque. In *Primera Mesa Redonda de Palenque, Part II*, edited by Merle Greene Robertson, pp. 5-19. Robert Louis Stevenson School, Pebble Beach.
- Marci, Martha J., and Matthew G. Looper 2003 *The New Catalog of Maya Hieroglyphs. Vol. 1: The Classic Period Inscriptions*. University of Oklahoma Press, Norman.
- Martin, Simon, and Nikolai Grube 2000 *Chronicle of the Maya Kings and Queens: Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya*. Thames and Hudson, London. (『古代マヤ王歴代誌』長谷川悦夫・徳江佐和子・野口雅樹訳, 創元社, 2002年)
- Matthewson, Kent 1977 Maya Urban Genesis Reconsidered: Trade and Intensive Agriculture as Primary Factors. *Journal of Historical Geography* 3:203-215.
- Morley, Sylvanus G. 1946 *The Ancient Maya*. Stanford University Press, Stanford.

- Sabloff, Jeremy A. 1994 *The New Archaeology and the Ancient Maya*. W. H. Freeman, New York. (『新しい考古学と古代マヤ文明』青山和夫訳、新評論、1998年)
- Pollock, Harry, E. D., Ralph L. Roys, Tatiana Proskouriakoff, and A. Ledyard Smith 1962 *Mayapan, Yucatan, Mexico*. Carnegie Institution of Washington Publication 619.
- Proskouriakoff, Tatiana 1960 Historical Implications of a Pattern of Dates at Piedras Negras, Guatemala. *American Antiquity* 25:454-475.
- Thompson, J. Eric S. 1927 *The Civilizations of the Mayas*. Field Museum of Natural History, leaflet 25, Chicago.
- Thompson, J. Eric S. 1930 *Ethnology of the Maya of Southern and Central British Honduras*. Field Museum of Natural History, Anthropological Series 17 (2), Chicago.
- Thompson, J. Eric S. 1939 *Excavations at San Jose, British Honduras*. Carnegie Institution of Washington Publication 506.
- Thompson, J. Eric S. 1945 A Survey of the Northern Maya Area. *American Antiquity* 11:2-24.
- Thompson, J. Eric S. 1948 *An Archaeological Reconnaissance in the Cotzumalhuapa Region, Escuintla, Guatemala*. Carnegie Institution of Washington Publication 574.
- Thompson, J. Eric S. 1950 *Maya Hieroglyphic Writing: An Introduction*. Carnegie Institution of Washington Publication 589.
- Thompson, J. Eric S. 1954 *The Rise and Fall of Maya Civilization*. University of Oklahoma Press, Norman.
- Thompson, J. Eric S. 1960 *Maya Hieroglyphic Writing: An Introduction*. Second Edition. University of Oklahoma Press, Norman.
- Thompson, J. Eric S. 1962 *A Catalog of Maya Hieroglyphs*. University of Oklahoma Press, Norman.
- Thompson, J. Eric S. 1963 *Maya Archaeologist*. University of Oklahoma Press, Norman.
- Thompson, J. Eric S. 1966 *The Rise and Fall of Maya Civilization*. Second Edition. University of Oklahoma Press, Norman. (『マヤ文明の興亡』青山和夫訳、新評論、2008年)
- Thompson, J. Eric S. 1970 *Maya History and Religion*. University of Oklahoma Press, Norman and London.
- Thompson, J. Eric S. 1971 *Maya Hieroglyphic Writing: An Introduction*. Third Edition. University of Oklahoma Press, Norman.
- Thompson, J. Eric S. 1972 *A Commentary on the Dresden Codex*. American Philosophical Society Memoir 93.
- Tozzer, Alfred 1941 *Landa's Relación de las Cosas de Yucatán*. Harvard University, Peabody Museum Papers 28, Cambridge. (『ユカタン事物記』林屋永吉訳、岩波書店、1982年)
- 吉田栄人 2006 「日本におけるマヤ・イメージの消費構造——高校生・大学生・放送大学生に対するアンケート調査からの一考察」『古代アメリカ』9:1-23.